



ゲーメの神秘思想とソロヴィヨフ(一)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004649

ベーメの神秘思想とソロヴィヨフ (一)

福 島 正 彦

一

ウラジーミル・ソロヴィヨフ (Vladimir Solov'ev, 1859-1900) は、一八七七年四月二七日付の一書簡の中で、「ソフィア」論の研究者として、ギヒテル、アーノルト、ボーデージの三人の名を挙げたあとで、次のように記している。

「三人とも皆、ほとんど私と同じような個人的経験をした。このことは極めて興味深いことであるが、しかし、本来の神哲学においては、三人ともすべてかなり弱いところがある。彼らはベーメに従っているが、ベーメの水準よりも低い。」⁽¹⁾

ベーメの神哲学に追随し、その影響を受けた人々として、ソロヴィヨフがここで挙げている三名は、それぞれ近代の西洋神秘思想史の中で、大きな仕事を残してきた人物である。ソロヴィヨフの挙げ

ている順序と異なるが、年代順に記せば、ボーデージ (John Por-taje, 1607-1681) は、ベーメの神秘思想の影響下に創設された英国のフィラデルフィア協会 (Philadelphia-Society) の指導者の一人であり、ギヒテル (Johann Georg Gichtel, 1638-1710) は、最初のドイツ語判ベーメ全集を編集し、これを一六八二年アムステルダムで刊行した人物である。⁽²⁾ アーノルト (Gottfried Arnold, 1666-1714) は、教会史家として広く知られ、その注著『非党派の教会史―異端史』二巻は、従来の正統的なキリスト教会の立場からは異端者として迫害されてきた神秘思想家たちの中に、かえってキリスト教の深い真理が具現されている、と見る特異な書物である。⁽³⁾ アーノルトは、この他にも、「神のソフィアあるいは智の秘義」という書物も著わしている。⁽⁴⁾

別の書簡 (一九〇〇年三月八日付) においてであるが、ソロヴィ

ヨフは、ペーメに影響を受けた者として、これらの人物の他に更にもう二名、サンマルタンとフランツ・フォン・バーダーの名を挙げている。⁽⁵⁾サンマルタン (Louis Claude de Saint-Martin, 1743-1803) は「ペーメの処女作『黎明』 (Aurora oder Morgenröte im Aufgang 1612) をフランス語に訳した、神智学的傾向をもつ思想家であり、バーダー (Franz von Bader, 1765-1841) は「ペーメを『キリスト教哲学の最も純粹な代表者』として評価し、膨大なペーメ論を著わした人物である。⁽⁶⁾

このように、西洋神秘思想史の中で大きな業績を残してきた人々の名をソロヴィヨフは列挙しているが、彼らはすべてペーメの強い影響下にあり、しかもその多くはペーメの達した神智学の高い水準に及びえなかった、というのである。ソロヴィヨフが、神智学の分野で、特にその乙女「ソフィア」論において、重要な意義を認めているのは、ペーメの追隨者の側ではなく、彼らに影響を与えたペーメその人の神秘思想にあることは間違いない。ソロヴィヨフは、「天の乙女ソフィアに関する『ペーメ説』と、そこから出てくる「ソフィア神秘主義」によって大きな刺激を受けている、⁽⁷⁾という解釈が生まれるのも当然のことである、と言えよう。

本稿の意図は、「天の乙女ソフィア」に関するペーメの神秘思想を紹介し、これとの関連でソロヴィヨフの性愛論に含まれる神秘主義的性格を明らかにすることである。

二

ペーメは「父」(der Vater)、「子」(der Sohn)、「聖霊」(der H. Geist) という男性的名辞によって表現されるはたらきのみが、人間の魂の悔悛と再生にとって十分である、とは考えなかった。これらの男性的名辞によって表現されるはたらきは、伝統的神学において神の三つのペルソナとされているが、ペーメはこのような男性的なペルソナが、同時に、神の第四のペルソナともいうべき女性的なはたらき(ペーメはこれを乙女ソフィア die Jungfrau Sophia と名づける)と協働することによって、始めて魂の悔悛と再生は可能である、と考えたのである。

『キリストへの道』(Der Weg zu Christo) の第一巻「真の悔悛について」(Von wahrer Buße) において、ペーメは「ささやかな祈り、あるいは哀れな傷ついた魂と人の内面的根底における乙女ソフィアとの対話」という教節を設け、「魂が悔悛を始めるとき」、及び「乙女ソフィアが魂に顕示されるとき」、両者はどのように振舞い語り合うかについて記し、魂とソフィアとの対話を展開している。まず、これに序論として、「パラダイスへの薔薇園の門」という表題を付けた上で、次のように述べている。

「隅のかしら石キリストが、心から回心し悔悛した人間の色あせた像の中で、活動するとき、キリストの霊の働きと共に乙女ソ

フィアが、乙女の飾りをつけて魂の色あせた像の中に現われる。彼女の前で魂は自分の不純性に驚き、あらゆる罪が魂の中で目覚め、彼女の前で恐れ身を震わす。ここで魂の罪について裁きがおこなわれ、魂は自分の無価値さに気付いてたじろぎ、美しい恋人を前にして恥ずかしく思い、考え込んで、このような宝を迎え入れるにまったく値しない自分を、もはや破滅だと思ふ。このことは、この宝を味わったことのある私たちには理解できるが、そうでない者は誰も知らないことである。しかし、気高いソフィアは魂の本質に近づき、やさしく魂に接吻し、愛の光線で魂の暗い火を染めて、魂を愛の接吻で輝かす。こうして魂はソフィアの身体で抱かれ、乙女の愛の力を享受し、歓喜のあまり跳びはねて歓喜を挙げ、この気高いソフィアの力により偉大な神を賛美する⁽⁸⁾。

このように、ベーメは回心した者の魂の中では、キリストの救済の力がはたらくだけでなく、それと「共に」、乙女の飾りを身につけた美しい「ソフィア」が魂の心像の中に現われる、というのである。このソフィアの汚れのない純粋さと照らし合わせて、始めて魂は自己の不純性と罪性に気づき、ソフィアの美しい姿と比べて、自己の醜悪な形相に恥ずかしさを感じるのである。しかし、それにもかかわらず、気高いソフィアは罪深い魂をしりぞけず、逆にこれを受け入れ、魂に接吻して、愛の光で魂を照らし輝かす。魂はソフィアのやさしい身体で抱擁され、乙女の純なる愛の力を享受して歓喜

するのであり、魂が神を賛美するのは、このソフィアの愛の力によるのであり、というのである。

ベーメは、以上の序論に続けて、次の五つの節を魂とソフィアとの対話に当てている。彼が、このような対話形式で、自己の思想を表現したものととしては、一般によく知られているのは、『キリストへの道』の第五巻と第七巻である。ベーメ自身がこれらに付けた題は、それぞれ、「Vom übersinnlichen Leben, im Gespräch eines Meisters und Jüngers, 超感性的生命について―師と弟子との対話―」「Gespräch Einer erleucht- und unerleuchteten Seelen, 光に照らされた魂と照らされない魂との対話」であるが、これらは、かつて細谷浩一氏によって邦訳され、『霊の命について』という書名のもとに公刊されたこと⁽⁹⁾があり、和文で目を通すことができる。しかし、今、序論的部分を紹介した、第一巻中の魂とソフィアとの対話の箇所は、研究論文中に部分的に訳出、引用されている場合を除いて、その全体にわたる邦訳はまだ現われていない。この箇所は、原文で五頁ほどの短いものにすぎないが、ベーメ独自の「ソフィア」神秘思想が、対話の形で十分盛り込まれている、と考えられるので、ここにその全文を訳出し、紹介しておきたい。(「」内は筆者の挿入)

三

魂〔は語る〕

「おお、偉大な神よ、あなたは力と甘美さを持ち、私を不安に駆り立てる人から救って下さったのですから、あなたに賛美、感謝、強さ、称賛、榮譽がありますように。おお、美しい身体であるあなたよ、私の心があなたをとらえましたが、あなたは一体こんなに長くどこにおられたのですか。私は、自分が地獄の中に、神の憤怒の中にいたと、思っていました。おお、やさしい愛よ、どうか私の傍に留まり、私の喜びと元気づけ〔の力〕であってください。正しい通りへ私を導いて下さい。あなたの愛に私は身を委ねます。ああ、私はあなたの前で暗黒です。どうか私を照らして下さい。おお、気高い愛よ、あなたの甘美な真珠を私に与え、私の中へ置いて下さい。」

おお、キリスト・イエスの内なる偉大な神よ。真理と大きな力と栄光をもつあなたが、私の罪を赦し、あなたの力でもって私を充たして下さいのですから、私はあなたをほめたたえ、賛美します。私は、私の生命の内なるあなたに歓声をあげ、慈愛深いあなたの精神のほかには、誰も開けることができない城塞の内におられるあなたを、賛美します。私の肢体はあなたの力を受けて喜び、私の心はあなたの愛に包まれて働きます。私を地獄から救出

し、私の内なる死を生に転化して下さったことに対して、私はあなたに永遠に感謝します。いま私は、あなたが約束された真理を感じています。おお、甘き愛よ、どうか私を二度と再びあなたから遠ざけないようにして下さい。あなたのかわい真珠の冠を私に贈り、私の内にいつまでも居て下さい。私があなたの内において永遠の喜びを享受できるように、どうか私の持ちものであってください。〔¹⁰〕

これに応えて乙女ソフィアが魂に語りかける。

「私の高貴な花婿、強さ、力よ、私のところへようこそいらっしゃいました。どうしてこんなに長く私を忘れておられたのですか。私はあなたの門の前で大きな悲しみに打ち沈んで、戸を叩かねばなりませんでしたし、いつもあなたに懇願し、呼び掛けておりましたのに。ところがあなたは私から顔をそむけ、耳を傾けないで、私の国から去って行かれました。あなたは私の光を見ることができず、闇の谷をさまよっておられました。私はあなたの傍に居て、いつもあなたに懇願していましたのに、あなたの罪が死の中にあなたを捕え、あなたは私に気付かれませんでした。私はつつましく身を屈してあなたのもとに行き、お呼びしましたが、あなたは神の怒りの国の支配を受けていて、私の謙讓さに注意されませんでした、あなたは悪魔を恋人になさっていたのですから。悪魔があなたを汚し、そのむなし盗賊の城をあなたの中に

築き、私の愛と忠実から完全にあなたを切り離し、彼の偽善的な誤った国へ連れ去りました。そこであなたは多くの罪を犯し悪事をはたらき、意志を私の愛から逸らして私との婚姻を破棄し、他人との情交に耽り、神からあなたに与えられた花嫁の私を、力の強さを失って色褪せた存在者の中に、放置したのです。あなたの火の力なしには、私は嬉々と楽しむことができません。なぜなら、あなたは私の夫であり、あなたによって私の輝きは顕らかになるのですから。あなたは、私の隠された奇跡をあなたの火の生命の中で顕らかにし、莊嚴の中へ導き入れることができるのです。あなたは何といても私の外では暗黒の家であり、そこでは不安と苦痛と、加えて敵意の苦しみが、存在するだけです。

おお、高貴な花嫁よ、どうか私の前に顔を見せて、いつまでも居て下さい。あなたの火の光線を私に注ぎ、あなたの欲求を私の中へ入れて私の火をとめて下さい。そうすれば、私はやさしい心であなたの火の光線を白光に変え、私の愛を、あなたの火の光線を通して、あなたの火の中へ導き入れ、永遠にあなたと接吻するでしょう。

おお、私の花嫁よ、あなたと結婚できるとは、私は何と幸せでしょう。どうかあなたの欲求で、あなたの強さと力の中で、私に接吻して下さい。そうすれば、私がつ美しいものすべてをあなた

たに見せ、私の甘美な愛と明るい光で、あなたの火の生命の中であなたを喜ばせてあげます。私たちが再び結婚したのを知って、いま聖天使たちがすべて私たちを祝福しています。さあ、私の美しい恋人よ、いつまでも私に誠実であって下さい。顔を私からもはやそむけないようにして下さい。私の愛を受けて、あなたの奇跡の業をおこなって下さい。そのために神はあなたを目覚めさせたのですから。」⁽¹¹⁾

魂は、気高い乙女ソフィアに、魂と乙女との中で再生した情愛のために、更に語る。

「ああ、私の気高い真珠よ、そして私の不安な火の生命の中に光をともした炎よ、あなたはどれほど私を変えて、あなたの喜びにしたことでしょう。おお、美しい愛よ、私は父アダムの中で臆くなり、火の力によって外的世界の快楽とむなしさの中へ自分を振り向け、他人との情交を受け入れました。従って、もしもあなたが大きな忠実さを示さず、神の怒りや地獄や暗黒の死を貫通し破壊して、私の住む不幸の家に入ってくることをせず、私の火の生命にあなたのやさしさと愛を再びもちきたすことをしないならば、私は水劫に闇の谷で他人との情交を続け、さまざまわなげればならなかったでしょう。おお、甘美な愛よ、あなたは神の泉から永遠の命の水を私に持ってきて、私の大きな渴きを潤し私を元気づけてくれました。以前の他人との情交の中では隠されて

いた神の慈愛を、私はあなたの中に見出します。私はあなたに抱かれて楽しむことができます。あなたは、私の火の不安を、大いなる歡喜に変えるからです。おお、優しい愛よ、どうかあなたの真珠を私に与え、私が永遠にこの喜びの内にいるようにして下さい。⁽¹²⁾

これに再び応えて、気高い乙女ソフィアは魂に語る。

「私のいとしい恋人よ、誠の宝よ、あなたは最初私をたいへん喜ばせてくれました。私は神の深淵の門を破り、神の怒り、地獄と死を通過し、あなたのもとへ、不幸な家の中へ入ってきました。そして恩寵によって私の愛をあなたに贈り、あなたを固く繋いでいた鎖と絆からあなたを救い出し、私の誠をあなたに捧げてくださいました。ところが、あなたはいま、私があなたにどうしてもたくない難しいことを、私に要求しています。あなたは私のかわいい真珠を自分の持ちものにしがっています。しかし、いとしい花婿よ、あなたは以前アダムにおいてこの真珠をどんなにないがしろにしたかを、思い出して下さい。このために、あなたはいままお大きな危険の渦中にあり、二つの危険な国でさまよっているのです。一つは、あなたの火の根源の中にある〔内的な〕国で、そこでは神は強い嫉妬深い神にして焼き尽くす火と呼ばれます。もう一つの国は、空気中の外的世界、むなししい墮落した肉と血で、ここではこの世界の快樂が悪魔の攻撃でもって不断にあな

たを襲っています。それなのに、あなたは大いに喜んで地上性を私の美の中へ再び導き入れ、私のかわいい真珠を汚しがっているのです。あたかもルチフェルが真珠を自分の所有物として手に入れたときのように、あなたは傲慢になって、神のハーモニーから離反しがっています。そうならば、私は恋人を永久に奪われなければなりません。

私は私のかわいい真珠を自分の中に持ちつづけた。かつて色褪せていたけれども、いま私の中で再び生氣を取り戻したあなたの内なる人性において、あなたの内なる天の中で、私は住みたい。そしてあなたがこの地上性をあなたから払いのけるときまで、このかわいい真珠をバラダイスに保存しておきたいのです。そのとき、私はこの真珠をあなたに与えて、あなた自身の持ちものとしましょう。しかも、私の顔と真珠の甘美な光線を、この地上的生命の存続するときに、よごこんであなたに提供しましょう。私は真珠と共に内的なコースの中で住み、あなたの忠実な、いとしい花嫁でありたい。あなたの地上的肉体の中へ入っては、私は結婚いたしません。なぜなら、私は天の女王であり、私の国はこの世のものではないからです〔ヨハネによる福音書、第一八章第三六節参照〕。しかしそれでも、私はあなたの外的生命を投げ捨てたくありません。むしろ私の愛の光線でもって、たびたび訪れたいと思います。なぜなら、あなたの外的人性が再び帰っ

て来なければならぬからです。しかし私はむなししい動物を所有したくありません。神が、その決意によって、こういうものを粗野に地上に創造したのではなく、あなたの欲望が、アダムの内なるこの動物的粗野さを、快樂を通してとらえたのであり、それを、熱と冷、更に苦痛と敵意と破壊「力」をもつ地上的性質によって喚起されたむなししい全本質から、とらえたのです。

さあ、私のいとしい恋人にして花婿よ、あなたを私の意志に委ねなさい。私は、この危険な地上的生活の中で、あなたを見捨てません。たとえ神の怒りがあなたをおおい、あなたは不安になって、私に見捨てられたと思う場合があるとしても、私はあなたの傍にいて、あなたを守ります。なぜ「私の意志に委ねなければならぬ」といふかといへば、あなたは自分の務めが何であるかが分かっていないからです。あなたはいま働き、産まなければなりません。あなたはこの樹の根であり、あなたから、さまざまの枝が生まれることとなりますが、それらのすべてが不安の内に生まれるにちがひありません。私はあなたの枝の中を通り、その樹液の中へ押し入って、枝に果実をもたらしますが、あなたはそれを知らないのです。なぜ「あなたの樹の枝に果実をもたらす」といへば、至高の者が私に命じて、あなたの傍と内に住むようにさせておられるからです。

従って、あなたを忍耐の帯でくるみなさい。肉の快樂から身を

守り、その意志と欲望を破り、あばれ馬を御すように手綱を引き締めなさい。そうすれば、私は火の精をもったあなたをたびたび訪れ、あなたに私の愛の接吻を与え、愛のしるしとしてパラダイスの冠を携えてきて、あなた自身が喜ぶようにそれを頭に載せてあげましょう。しかし、いまは私の真珠をあなたの所有物として与えるわけにはいきません。あなたは平静の内に留まらなければなりません。そして、主がハーモニーによってあなたの内に演奏されることに耳をすまし、私の力によってあなたの調への響きと本質とを主に与えなければなりません。なぜなら、あなたはいまや主の口の使者であり、主の榮譽と光榮をのべ伝えなければならぬからです。このゆえに、私はいま新たにあなたと結合し、悪魔と死との闘いで勝ち取った私の騎士の勝利の冠をあなたの頭にのせました。しかし、あなたが贈った真珠の冠は、あなたの側に保存しておきます。これは、あなたが私の前で清らかなるまでは、もはや身に付けることのないものです」⁽¹³⁾

魂がもう一度、気高いソフィアに語る。

「ああ、私の美しい、かわいい妻よ、あなたを前にして私は何と云ってよいでしょう。わが身をひたすらあなたに委ねましよう。私は自分を押えることができないのです。あなたがいま真珠を与えたくないのなら、好きなようにして結構です。ただあなたの愛の光線だけは私に与えて、この巡礼の町を通る私を導いて下

さい。あなたの好きなものを、私の中に目覚めさせ、生み出して下さい。私は今後、あなたのもものとなり、あなたが私を通して欲するもの以外には、もはや何も欲求しようとしません。私はあなたの甘美な愛を取り逃がし、誠意を尽くしませんでしたから、永劫の罰を受けるようになってしまったのです。ところが、あなたは私への愛から地獄の不安の中へやって来て、私を苦痛から救い、もう一度夫として受け入れました。従って、私はいまあなたの愛のために我意を破り、あなたに従順となり、あなたの愛を待っています。どんな困難の中にあってもあなたが私の傍にいて、私を見捨てないのを知ったことで、私は十分です。おお、やさしい、いとしい人よ、私は自分の燃えるような顔をあなたに向けます。おお、美しい冠よ、どうか早く私をあなたの中へ包み込んで、私を不安から導き出して下さい。私は永遠にあなた自身のものであり、もはや決してあなたから離れません。⁽¹⁴⁾

気高いソフィアが応えて、魂を心から慰め、語る。

「私の高貴な花婿よ、安心なさい。私は至高の愛をもって、あなたと婚約し、忠実な心をもってあなたと結ばれました。私は世の終りまで毎日あなたの傍と内にいたい。あなたのところへ来て、あなたの内面のコーラスの中で、あなたの内に住まいを建てたい。あなたは私の泉から飲むとよろしい。なぜなら、私はいまやあなたのものであり、あなたは私のものであって、もはや敵が

私たちを切り離すことができません。あなたの火のような固有性によって働きなさい。そうすれば、私は愛の光線をあなたの働きの中へ注ぎ入れましょう。火の精を与えて下さい。そうすれば、私は光と成長との精を与えましょう。私たちは、神によって定められたことを、この世において行ないましょう。そして、神の宮——それは私たち自身なのです——の中で、神に仕えましょう。⁽¹⁵⁾

四

以上の「魂」と「ソフィア」との対話にあらわれるベームの神秘思想の中で、特にソロヴィヨフの注目を引いたのであるかと考えられるものを抽出するならば、それはベームの「愛」に関する見解であり、次の三点にまとめることができる。

一、乙女ソフィアは、人間の魂に「神から与えられた花嫁」(von Gott gegebene Braut)であり、「高貴な花婿」(edler Brautgam)なる魂と、この花嫁ソフィアとの相互の「愛」は、「輪舞」「抱擁」「接吻」「結婚」というような性的関係を伴う身体的結合である。この愛は、単なる抽象的な精神的愛ではなく、「夫」と「妻」とのあいだに交わされる具体的な性愛のイメージと連なるものである。

二、美しい身体、やさしい情愛、貞節な心をもったソフィアは、気高く純粋であるけれども、彼女自身が「嬉々として楽しむ」こと

ができるためには、夫である魂の「火の力」を自らの内に受け入れなければならない。ソフィアの輝く光は、暗黒の魂を通して、魂の「火の生命」「欲求」の中で始めて顕らかなるのである。魂は、ソフィアの愛を受けて、永遠の喜び、生気、明るさを獲得するが、ソフィアの方もまた、魂と結合してのみ、自己の情愛とやさしさを示す対象を得ることができるのである。

三、男性的なるものと女性的なるものとの相互愛である性愛は、どこまでも「地上的生活の中で」あらわれるものであり、たとえソフィアの気高さと貞節さそのものは「この世のものでない」としても、彼女の愛の現実的成就はこの地上でなされなければならない。だからこそ、彼女は魂に向かって、「私は、この危険な地上的生活の中で、あなたを見捨てません」「私は世の終りまで毎日あなたの傍と内にいたい」と語りかけるのである。性愛は、「肢体」という「外的生命」と不可分であり、「愛のしるし」はそこに示され、内なる至純の愛も、この外的身体の中に現われてこそ、具体的にそれと知られることができる。ただ、このように身体と不可分であるといつても、魂とソフィアの婚姻としての性的結合は、単なる動物的な営みと同一視されてはならない。「私はむなししい動物を所有したくありません」というソフィアの願いは、彼女と魂との婚姻が、互いの精神的要求を離れた、単に肉体的な性本能にもとづく結合ではありえない、ことを示している。人間の性愛は、単なる動物的次

元での肉体的結合と明確に区別されねばならない。精神的要求を離れた単なる肉体的結合は、「快樂とむなしさ」の「情交」にすぎない。その結末は「暗黒の死」である。魂がこのような情交のみを求めるとは、その「地上的肉体の中へ」入って行こうとは、ソフィアは決してしない。彼女はこのようなものとの交わりを拒絶し、「私は結婚いたしません」と断言している。

ソフィアと魂との結婚が成立するのは、精神・身体的全体としての人間においてのみである。この全体としての人間においては、男性的なはたらき(魂)と女性的なはたらき(ソフィア)とが緊密に結合し、相互に補完し合っていて、互いに「神の宮」と呼ばれるような、神秘的性格を具えた存在である、とベーメは言うのである。このようにベーメによって説かれた、人間の性愛の神秘的性格を、ソロヴィヨフはその性愛論の中で、より詳細に説明しようとしている。彼は、「愛の意味」の中で、性愛の「神秘的根源」(мистическое начало)⁽¹⁶⁾あるいは「神秘的基礎」(мистическое основа)⁽¹⁷⁾について語っている。しかし、それは、いったい何を指して言われているのか。我々は次に、この点についてソロヴィヨフの見解を考察した。(未完)

註

(一) An Gräfin Sofija Andreevna Tolstaja, 27. April 1877.

- St. Petersburg. In: Solowjews Leben in Briefen und Gedichten, hrsg. von L. Müller und I. Wille, München, 1977, S. 66.
- (23) Vgl. Wilhelm Struck, Der Einfluß Jakob Böhmes auf die englische Literatur des 17. Jahrhunderts, Berlin, 1936, S. 132.
- (24) Vgl. Ernst-Heinz Lemper, Jakob Böhme Leben und Werk, Berlin, 1976, S. 190.
- (25) Gottfried Arnold, Kirchen- und Ketzerhistorie, 2 Bde, Frankfurt a. M. 1729.
- (26) An Anna Nikolaevna Smidt. 8. März 1900. In: Solowjews Leben in Briefen und Gedichten. *ibid.* S. 195.
- (27) Alexandre Koyré, La Philosophie de Jacob Boehme, Paris, 1929, p. IX.
- (28) Schlusswort des Übersetzers, In: Deutsche Gesamtausgabe der Werke von Wladimir Solowjew, 7 Band, Erich Wewel Verlag, 1953, S. 434.
- 但し、訳者自身がこの解釈を以てするものではなく、ソロウヰヨンの性愛論の独自性を高く評価するスルツィエフと比較し、ソロウヰヨンをハーメとの関連性を強調する側の一つの見方として紹介してあるものである。
- (29) Jakob Böhme, Der Weg zu Christo, Von wahrer Buße, Kap. 45.
- (30) 朝日出版社、昭和三九年。
- (31) J. Böhme, *ibid.* Kap. 45. 訳文中、「」内は筆者が挿入

したものである。

- (11) Kap. 47.
- (12) Kap. 48.
- (13) Kap. 49. 文中の「ルシモニアは、いわゆる悪魔ルシモニアの」。「ハーメによれば、ルシモニアは、元来、美しく輝く天使として創造されたが、自己の美しさを輝きに自惚れ、傲慢の心を抱えた途端、悪魔化して転落した」とされる。
- (14) Kap. 50.
- (15) Kap. 51.
- (16) Собрание сочинений В. С. Соловьева с 3-мя портретами и автографом, Под редакцией и с примечаниями С. М. Соловьева и З. Д. Радлова, Второе издание, Том сельдмой (1892-1897), Петербург, Смысл любви (1892-1894), стр. 38.
- (17) стр. 48.